

1. 信仰によって、アブラハムは、相続財産として受け取るべき地に出て行けとの召しを受けた時、これに従い、どこに行くのかわからないで、出て行きました。(11:8)
 - a. アブラハムが信仰の父と呼ばれる理由はたくさん挙げられるが、一つには彼の信仰は後に続く私たちが見習うべき型であったからである。自分の系図をアブラハムまでたどることができるユダヤ人だけでなく神と共に歩む人生を望む人はすべてアブラハムの生き方から学ぶべきである。
 - b. この記述の中には3つの出来事が起こっている。アブラハムは神からの召しを受けた。神に従う者は人生のどこかの段階で神からのコールを経験する。すでに受けた人もいるかもしれないし、言葉では説明できない体験をした人もいるかもしれないが、クリスチャンとなった人はどこかの時点で必ず神からの召しを受けている。
 - c. アブラハムはそのコーリングに従った。ある人にとっては、自分の人生にイエスを受け入れた時がそのコールであったかもしれない。信仰に必要な要素は従順である。従順であることがコーリングに含まれる神の力と約束を開く鍵となる。
 - d. アブラハムは出て行った。信仰はあなたを行なったことのない場所、会ったことのない人、自分でしたことのない行動へと導く。アブラハムの人生に見られるように、信仰は発揮されると自分のコントロールを離れすべてを神にゆだねるようにさせる。信仰とは神に信頼をおくことなので、何事も自分の思い通りにしようとする人は同時に信仰の人になることはできない。
2. 信仰によって、彼は約束された地に他国人のようにして住み、同じ約束をともに相続するイサクやヤコブとともに天幕生活をしました。彼は、堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいたからです。その都を設計し建設されたのは神です。(11:9-10)
 - a. アブラハムはどこに行くのかわからず、またどのようにして多くの国民の父になるかも知らず出て行った。彼にわかっていたことはこれは神からの召しであること、そして+神は何らかの形でそれを実現される、ということだけであった。
 - b. この神への信頼は、慣れた土地、育った家、親しい友人や家族を離れ、異国の地で見知らぬ人たちと天幕生活をすることであった。信仰は多くの場合代価と犠牲を伴う。
 - c. ただし信仰に伴うのは犠牲のための犠牲ではない。信仰は未来に目を向けているものであり、アブラハムの場合は天の都に目を向けていた。犠牲の価値に対して神の御約束の大きさというのはいわば種と木のようなものである。将来十分価値の出る投資である。
3. 信仰によって、サラも、すでにその年を過ぎた身であるのに、子を宿す力を与えられました。彼女は約束してくださった方を真実な方と考えたからです。(11:11)
 - a. 信仰に対してあなたが払う代価は将来への投資となるだけでなく、超自然的な力も付いてくる。サラの人生を見るとそれがよくわかる。不妊の女サラは神を信じ神が真実な方だと考えた時、神は彼女の胎を開かれ高齢にもかかわらず彼女は子を宿した。
 - b. あなたの人生のうちに働く神の力を見たければ信仰がなければならない。逆に信仰の足りなさは神の力を抑制してしまう。
4. そこで、ひとりの、しかも死んだも同様のアブラハムから、天の星のように、また海べの数えきれない砂のように数多い子孫が生まれたのです。(11:12)
 - a. アブラハムとサラは信仰と従順によってイサクを宿した。そして今日アブラハムまで系図をたどることができる人々の数はおびただしいものである。
 - b. すべては一つの約束、一つのコールに従うことから始まった。そしてアブラハムから肉体的、霊的に生まれた子供たちは増え続け現在に至っている。こうしている間にも天にいるアブラハムに、神は「私の言った通りだろう。」とおっしゃっているに違いない。
 - c. 神の御約束はこの世、この人生を超越したものである。神の御声を聞いたならためらわず従いついて行こう。